

96春 中国女文字現地調査報告

Report on “Women’s Phonetic Letters” in China : Spring 1996

遠藤 織枝

陳 力 衛

劉 穎

95年9月の現地調査の概略と、96年3月の現地調査で明らかになったことを報告する。女文字の存在と伝承に関する予備調査を現地政府に依頼したが、その結果は信頼できる部分が少なく、調査は自分たちでする以外にないとの教訓を得た。

現在女文字を読み書きできる女性は陽煥宜、何艶新の2名のみだが、外部から訪れる研究者が増え、資料を求めていることを知って、最近、女文字を書くようになった女性もいるし、資料もにせ物も出はじめている。

女文字自体については、90年代初めまでの熟達した女文字伝承者であった高銀仙・義年華の没後にその存在のクローズアップされた陽煥宜の文字は、実際にその文字で伝え合う相手もない、彼女一人の文字となってしまったため、かなりルーズな使われ方をし、高銀仙らの文字と変質してきている。何艶新のほうは祖母に教わったとおりの正確な文字遣いをしており、正統的伝承者として位置づけることが可能である。

キーワード：女文字の状況、女文字の変質、女文字の消滅、非識字率

I 95年9月の調査の概略

中国湖南省の女文字について、前報告「94夏湖南省女文字現地調査報告」(9号-1)以降の調査と研究の結果を報告する。前報告発表以後95年9月7日～15日、96年3月17日～24日に現地調査を行ったが(以下「95」「96春」と略記する)、95年9月のものについては『ことば』16号(現代日本語研究会、95年12月)⁽¹⁾に報告しているので、ここでは概略にとどめる。

「95」では①江永県・道県の従来存在が確認されていた2県に隣接する江華瑶族自治県（以下「江華県」と略記）の女文字の有無を確認すること、②何艶新の女文字の回復ぶりを調べること、③女文字伝承の直接的間接的情報保有者を探しだすこと、の3つの目標のもとに調査を行った。

①については、60年代70年代に行われた全国規模の民族調査の調査員を務め、60年代の資料の中に女文字を見たという3人の男性に会い、江華県の女文字の状況を調べた。60年代の資料が残っているとして、それを徹底的に調べだせば、彼らの見たという女文字資料も探しだせるかもしれないが、現在のところは、彼らの証言の裏づけになる資料は何も見出せないでいる。

江永県上江墟郷を中心とする女文字伝播地域の女性たちは「女紅」（＝縫物、刺繍、織物、切り紙細工など従来女性の仕事とされていた手仕事の総称）が得意で、女文字を織り込んだ細い帯の織れる人がいる。江華県にもそのような織物があるというので、鳳尾村、廟角村、白牛山を訪ね、織った物を見せてもらった。上江墟郷一帯のものは幅4cm長さ2mほどの細長いものが多いが、ここで見たのは同じサイズの帯のほか、布団の皮にするという30cm×120cmぐらいの布、40cm×120cmぐらいのものなど幅の広いものも多かった。それらの中には、たくさんの漢字を織り込んだもの、幾何学模様のような図案のものがあった。

図案の中に「卍」「田」など女文字と同形のものが含まれているものもあった。上江墟のような、女文字だけの歌が織り込まれているのはなかった。

その他、美しい刺繍のほどこされた布鞋や、帽子、エプロンなどにも触れることができ、江華県でも「女紅」が盛んだったことは確かめられたが、織物の中の字形を文字とみるか、図案とみるか、つまり文字が先にあって織物に取り入れられたのか、図案が先にあってそれがたまたま上江墟の女文字と一致するのか（上江墟の女文字で出自を刺繍の図案に求められるものもかなりある）、それは確認できなかった。

他方、江華県は瑤族が半数以上を占める地方である。瑤族の女性たちは地元男性奉居楚（60年代の民族調査の調査員の1人）の話によると、古くから自由恋愛の風習があり、男性の求愛を受けるか否か女性自身が決めたという。また、山地の瑤族であり山にのぼって働くため、てん足の女性はいなかった。さらに「楼上女」（二階で女紅をする女たち）の習慣もないという。一方、上江墟の娘たちは親の決めた結婚に泣く泣く従う。結婚で義理の姉妹と別れるのが辛くて「三朝書」に辛い思いを書いたり、一緒に「女紅」をしながら刺繍・織物の技術と同時に女文字も伝えあったであろう女性たちと、江華の女性たちは生活環境が大きく異なる。

江永県は漢族と瑤族の文化が融合し、女文字はその両文化融合の産物とされるが、江華県の方は瑤族文化の色彩がより濃い。融合したとしてもその漢文化の比率は低い。となると、漢字にルーツをもつ多くの女文字の伝承は、江永県ほど容易ではないと考えられる。

60年代に確かに見たという人（元小学校教員で、現在県誌編纂室勤務）がいる以上、それを否定することはできないが、60年代に読み書きできる人がいたにせよ、江永県と同じような密度や文字の多さではなかったのではないか。県や省の档案馆（戸籍簿を扱う公的機関）など公的資料を扱う機関での調査により、さらに検討する必要がある。

②の何艶新の文字について、「95」で、かなりの回復ぶりが確認でき、陽煥宜の後継者として期待できると判断した。③については十分に調査できず、「96春」の主な課題として持ち越した。

すなわち、新しい情報を掘り起こすために「95」は従来と同じ、以前伝承者がいた村、その女性の出身の村、ある古老がかつて女文字を見たという村、などへ直接出向き、その村々で村長に案内されて聞き取り調査をする、という方法をとった。

しかし、これでは情報のありそうな村々の女文字関連の情報をすべて汲みとることはできない。村長のつれていってくれた先の女性に、知らない、見たこともない、と言われてしまえばそれで終わりである。その女性がこ

の村にはだれも知る人はない、と言えば、次への手がかりも得られない。村長がこの村でいちばん年上の女性といて案内してくれた先が留守だったら、これもそこで終わってしまう。そういうときでも、我々の調査グループが車から降り、村の中に入って行くのを珍しがって見にくる人もいて、それらの人の中の高齢と思われる人に見本をみせて、こういう文字を知っているか、と尋ねることはできる。そして偶然その人が資料をもっていたりすることはある。しかし、このような方法では、偶然の僥倖をあてにするしかできない。

上江墟郷については趙麗明も十年も通い続けてほとんど調べ尽くしたものと考えていた。ところが、94年夏上江墟郷の河淵村という、女文字が比較的最近まで残っていて、趙が毎年足を運んでいた村で、新しい伝承者何艶所を探し出すことができた。調べ尽くされたと思われた地域にもこのように新しい「発掘」があった。

このことから「96春」では、せめて上江墟郷の村々だけでも徹底的に調べ尽くしたい、と考えた。もちろん、上江墟郷周辺の郷や村にも女文字が確認されているので、その調査もしたい、さらに、上江墟郷から他の郷村へ結婚などで出た女性の中の、娘時代女文字を習得し、使った人々を訪ねて調査もしたい、と考える。しかし、現在、そこまで手を拡げる力をもたないので、上江墟郷の村々から一つずつぶつけていこうと考えたのである。

II 上江墟郷の「徹底」調査

従来、だれかの情報をたどって、名前の出た人の家を訪ねて、聞き取るという調査では、抜け落ちる部分が多いので、村単位で予め村人全員への調査票による調査を行い、その情報を基に詳しく個々に聞いていくという二段がまえの調査を考えた。村人全員への調査となると、外国人研究者の手に負えなくなる。そこで、これまで3回の調査の際の案内役をしてきている現地江永県政府の旅游局長に趣旨を説明して協力を依頼した。

II-1 予備調査で得た教訓

96年1月から局長陳国森と電話、FAXでの連絡を取り、了解を得て別紙1のような調査票と、見本の写真を添えたものを作成した。これを局長が上江墟郷の15の村の村長を集めて説明し、村長を通じて各村4～5人の調査員を依頼する、各調査員、村長には相応の謝礼を払う、この調査の情報に基づいて聞き取り調査をしたいから3月中旬我々が現地へ着くまでに調査を終えておく、ということで話がついた。

別紙1

女 书 调 查 表

☆被调查人情况栏

| | | | | | |
|----------------------------|--|---------|--|-----|--|
| 姓 名 | | 性 别 | | 年 龄 | |
| 民 族 | | 文化程度 | | 职 业 | |
| 原籍 (出生地) | | 以后住过的地方 | | | |
| 能说几种话 (江永话、西南官话、瑶语、普通话、其他) | | | | | |

☆对女书了解状况

| | | | | | |
|--|---|---|---|-----|--|
| (1)会读 (例、参考资料①、②) 程度: 基本没错 断断续续 只知个别字 会写 (例、数字诗 [一去二三里、烟村四五家、楼台六七座、八九十枝花]) 总共能识多少字 总共会写多少字 | | | | | |
| (2)存有三朝书及写有女书的扇子、手巾、花带等 (参考资料③④⑤) 有几种 | | | | | |
| (3)年轻时是否学过女书 几岁时 跟谁学的 现在能记多少 | | | | | |
| (4)是否见过女书 在什么地方 什么时候 谁的 | | | | | |
| (5)是否知道会女书的人 (请写出姓名、地址) 姓名_____ 地址_____ 姓名_____ 地址_____ | | | | | |
| 调查地点 县 乡 村 (村里有多少人口 成人女姓有多少人) | | | | | |
| 调查日期 | 年 | 月 | 日 | 调查人 | |

3月18日我々が江永県に着いたとき、調査票は1枚も回収されていなかった。局長はわざわざ回収のための車は出せないから我々が調査に村へ行くとき調査票も回収してくるといふ。調査へ行くためにその調査票の情報を生かすという段取りが、まずくずれてしまった。しかも、15の村すべてに調査票は配布されず、河淵村（以下「H村」）、楊家村（以下「Y村」）、甫尾村（以下「P村」）、桐口村（以下「T村」）の4か村と、その周辺の4つの自然村にだけ配布されていた。

したがって、「96春」で目ざした「徹底」調査は、予備調査の段階ですでに不徹底なものにならざるをえなかった。

その結果、我々が現地へ到着後、急いで回収された調査票の女文字に関する情報に基づいて、該当者への詳細な聞き取り調査は、ごく一部しかできなかった。一方、調査票の記入自体がきわめてずさんで信頼性の低いものが多いこともわかった。（女文字を見たことがあるかの項目に、回収されたT村調査票196枚すべてに同じことが書かれていた）

予備調査として現地政府に依頼した調査でも、結局は、あまり役に立たないことがわかり、「徹底」調査は自分たちでしないかぎりできない、という教訓を得た。

ただし、被調査者の背景を知るための、本人に関する調査項目から、この地の人々の識字率、教育の程度を知りえたのは収穫であった。女文字創造、伝承の環境の一つの側面の理解につながるからである。

この項目に「不識字」「文盲」と記される調査票が多いことからわかるが、文字の読み書きできない人も多く、その人たちは調査票に自分では記入できない。調査員が聞きとって記入しているので、真実の回答かどうか、100%信頼できるかどうか疑問は残る。しかし、被調査者の「文盲」とか「中卒」とかという情報は調査員が本人に聞いたものであろうから、この欄に記入されたものは真実に近いと考えていいたい。

今回、現地政府が予備調査をした村々と、回収した調査票数は以下のとおりである。（表1）

表1 調査対象の村々と回収策

| 調査地域 | 回収数 | 無効数 | 有効数 |
|------|------|------------|-----|
| 呼家村 | 3 | | 3 |
| 下新屋村 | 52 | 記入もれが多い 52 | 0 |
| 上新屋村 | 7 | 同上 7 | 0 |
| 大村子村 | 36 | 同上 36 | 0 |
| 浮橋村 | 10 | 同上 10 | 0 |
| 河淵村 | 350 | 文字不明 3 | 347 |
| 楊家村 | 196 | | 196 |
| 甫尾村 | 93 | 文字不明 6 | 87 |
| 桐口村 | 319 | 同上 1 | 318 |
| 計 | 1066 | 119 | 947 |

II-2 調査票にみる「文化程度」

別紙1の上段、被調査人情況欄の日本ではいわゆる学歴にあたる「文化程度」という項目によって、この地の人々の識字率を表1の有効調査票947人に基づいてみていく。なお呼家村は数が少ないので近くの甫尾村に含めて整理する。

ここでの「文化程度」の区別は、①不識字、②小学卒、③初中卒、④高中卒、⑤専門学校卒に整理する。①は「不識字」「文盲」と記されていたものを統合した。③は初級中学校のことで日本の中学校に相当する。④は高級中学校で、日本の高等学校に当たる。⑤としては、中専（中等専門学校）、初師（初等師範学校）、中師（中等師範学校）などと記入されていたものを一括したものである。

「民族」はこの地方では入りまじっていて、厳密に血縁中心に民族別になっているわけではない。自己申告によるものであるから同一家族、兄弟姉妹でも称する民族は異なる場合もあるが、各自のアイデンティティを示す一項目としてとりあげた。

まず、村ごとの性別の被調査者数を示す。

表2 被調査者数(性別)

| | 女 | 男 | 計 |
|----------|-----|-----|-----|
| 河 淵 村(H) | 341 | 6 | 347 |
| 楊 家 村(Y) | 90 | 102 | 192 |
| 甫 尾 村(P) | 36 | 54 | 90 |
| 桐 口 村(T) | 139 | 179 | 318 |
| 計 | 606 | 341 | 947 |

河淵村(H)は男女比が偏っているので、女性だけの文化程度をみる際には考察対象とするが、全体を平均にみる場合は除外する。

以上947人を年代別、性別、民族別を横軸にとり、文化程度、村別を縦軸にとった一覧表で示す。(表3)

「文化程度」の全体平均()内はH村を含めた場合は、①不識字22.5%(39.1%)②小学卒38.7%(32.4%)③初中卒29.0%(21.6%)④高中卒8.5%(5.9%)⑤専門学校卒1.3%(1.0%)である。H村を除くと不識字者の率(以下「非識字率」とする)が減り、小学卒以上の率(以下「識字率」とする)が増える。これはH村の被調査者のほとんどが女性で、女性の非識字率が男性よりはるかに高いことによるものである。

すなわち、今回、江永县政府に依頼して行った、上江墟郷4カ村を対象とする調査の結果、当該地域での非識字率は22.5%、識字率77.5%ということになる。

瑤族と漢族の民族別の文化程度としては、瑤族664人中の非識字率39.8%識字率60.2%、漢族283人中の非識字率37.5%識字率62.5%で民族間での有意差はみられない。(表4)

性別はどうか。ここではH村を除外して3村の合計で平均してみる。

女性265人中の非識字率32.1%、識字率67.9%、男性335人中の非識字率14.9%、識字率85.1%で、女性の非識字率は男性の2倍以上である。

表3 「文化程度」調査一覽表

| 文化程度 | 年代 | 10代 | | | | 20代 | | | | 30代 | | | | 40代 | | | |
|----------|---------|-----|---|----|---|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|
| | 性別 | 女 | | 男 | | 女 | | 男 | | 女 | | 男 | | 女 | | 男 | |
| | 民族 村 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 |
| 不識字 | H | 10 | 2 | 0 | 0 | 35 | 2 | 0 | 0 | 52 | 8 | 1 | 0 | 58 | 9 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 3 | 8 | 0 | 0 | 2 | 11 | 0 | 1 |
| | P | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 | 0 |
| | T | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 1 | 3 | 0 | 1 | 5 | 1 | 0 | 1 | 5 | 5 | 0 |
| 小学卒 | H | 12 | 1 | 0 | 0 | 40 | 4 | 0 | 0 | 7 | 1 | 0 | 0 | 6 | 1 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 17 | 2 | 6 | 2 | 8 | 3 | 6 | 1 | 2 | 4 | 5 |
| | P | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 3 | 0 | 0 | 1 | 8 | 3 | 0 | 2 | 4 | 12 | 0 |
| | T | 12 | 0 | 7 | 0 | 23 | 3 | 20 | 0 | 3 | 9 | 11 | 0 | 4 | 6 | 9 | 0 |
| 初中卒 | H | 7 | 2 | 0 | 0 | 12 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 2 | 14 | 0 | 1 | 2 | 8 | 0 | 0 | 2 | 4 |
| | P | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 |
| | T | 2 | 0 | 6 | 0 | 9 | 5 | 29 | 0 | 3 | 9 | 20 | 0 | 1 | 7 | 9 | 0 |
| 高中卒 | H | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 3 | 5 | 7 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | P | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | T | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14 | 0 | 0 | 1 | 6 | 0 |
| 高中以上 | H | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | P | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | T | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 村別小計 | H | 31 | 5 | 0 | 0 | 87 | 6 | 1 | 0 | 64 | 9 | 2 | 0 | 68 | 12 | 0 | 0 |
| | Y | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 20 | 5 | 20 | 7 | 20 | 10 | 21 | 3 | 13 | 7 | 11 |
| | P | 1 | 0 | 2 | 0 | 5 | 3 | 5 | 0 | 2 | 8 | 15 | 0 | 4 | 6 | 17 | 0 |
| | T | 17 | 0 | 14 | 0 | 35 | 9 | 54 | 0 | 7 | 23 | 46 | 0 | 6 | 19 | 30 | 0 |
| 性別・民族別小計 | | 49 | 6 | 16 | 0 | 133 | 38 | 65 | 20 | 80 | 60 | 73 | 21 | 81 | 50 | 54 | 11 |
| 年代別小計 | | 71 | | | | 256 | | | | 234 | | | | 196 | | | |

「文学部紀要」文教大学文学部第10-1号 遠藤織枝 陳力衛 劉穎

| 50代 | | | | 60代 | | | | 70代以上 | | | | 性別・民族別小計 | | | | 村別小計 | 文化程度別小計 (H村除外) |
|-----|----|----|---|-----|----|----|----|-------|---|---|---|----------|----|-----|----|------|--------------------------------|
| 女 | | 男 | | 女 | | 男 | | 女 | | 男 | | 女 | | 男 | | | |
| 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | 瑠 | 漢 | | |
| 19 | 1 | 2 | 1 | 15 | 5 | 0 | 0 | 12 | 3 | 0 | 0 | 201 | 30 | 3 | 1 | 235 | 370 39.1% (135 22.5%) |
| 0 | 8 | 0 | 3 | 0 | 10 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 3 | 7 | 38 | 1 | 10 | 56 | |
| 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 3 | 6 | 9 | 0 | 18 | |
| 2 | 5 | 6 | 0 | 2 | 3 | 11 | 0 | 1 | 2 | 4 | 0 | 10 | 21 | 30 | 0 | 61 | |
| 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 68 | 7 | 0 | 0 | 75 | 205 32.4% (232 38.7%) |
| 0 | 1 | 1 | 5 | 1 | 0 | 1 | 6 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | 28 | 11 | 29 | 75 | |
| 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 6 | 17 | 19 | 42 | |
| 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 44 | 21 | 50 | 0 | 115 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 26 | 5 | 0 | 0 | 31 | 205 21.6% (174 29.0%) |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 6 | 28 | 39 | |
| 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 23 | 0 | 27 | |
| 0 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15 | 24 | 69 | 0 | 108 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 | 5 | 56 5.9% (51 8.5%) |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 7 | 9 | 21 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 3 | |
| 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 24 | 0 | 27 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 9 1.0% (8 1.3%) |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 6 | 0 | 7 | |
| 21 | 1 | 2 | 1 | 16 | 5 | 0 | 0 | 12 | 4 | 0 | 0 | 299 | 42 | 5 | 1 | 347 | 947 (600) |
| 0 | 9 | 1 | 8 | 1 | 10 | 2 | 13 | 0 | 0 | 0 | 4 | 17 | 73 | 25 | 77 | 192 | |
| 1 | 3 | 8 | 0 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 13 | 23 | 54 | 0 | 90 | |
| 3 | 9 | 12 | 0 | 3 | 4 | 18 | 0 | 1 | 3 | 5 | 0 | 72 | 67 | 179 | 0 | 318 | |
| 25 | 22 | 23 | 9 | 20 | 22 | 23 | 13 | 13 | 7 | 9 | 4 | | | | | | |
| 79 | | | | 78 | | | | 33 | | | | | | | | | |

表4 民族別の「文化程度」 (H村を除く)

| 文化程度 | | 民族 | | 瑶 族 | | 漢 族 | |
|------|-------|-------|-------|--------|-----|-------|--------|
| | | 不 識 字 | | | | | |
| 識 字 | 小 学 卒 | 205 | 30.9 | } 60.2 | 102 | 36.0 | } 62.5 |
| | 初 中 卒 | 144 | 21.7 | | 61 | 21.6 | |
| | 高 中 卒 | 43 | 6.5 | | 13 | 4.6 | |
| | 高中以上卒 | 8 | 1.1 | | 1 | 0.4 | |
| | 計 | 664 | 100.0 | | 283 | 100.0 | |

表5 性別の「文化程度」 (H村を除く)

| 文化程度 | | 性 | | 女 | | 男 | |
|------|-------|-------|-------|--------|-----|-------|--------|
| | | 不 識 字 | | | | | |
| 識 字 | 小 学 卒 | 123 | 46.4 | } 67.9 | 109 | 32.4 | } 85.1 |
| | 初 中 卒 | 48 | 18.1 | | 126 | 37.5 | |
| | 高 中 卒 | 8 | 3.0 | | 43 | 12.8 | |
| | 高中以上卒 | 1 | 0.4 | | 8 | 2.4 | |
| | 計 | 265 | 100.0 | | 336 | 100.0 | |

また、識字層の中では、男性は初中卒が最も多いが、女性は小学卒が最も多く、ここでも、女性の受ける教育が男性より低いレベルにとどまっていることがわかる。高中卒以上は女性は3.4%にすぎず、男性の15.2%に比べて4分の1にも達していない。

次に年代別の「文化程度」をみることにする。(表6)

非識字率だけを、年代別に、またその年代別を女と男に分けたものをグラフにすると図1のようになる。

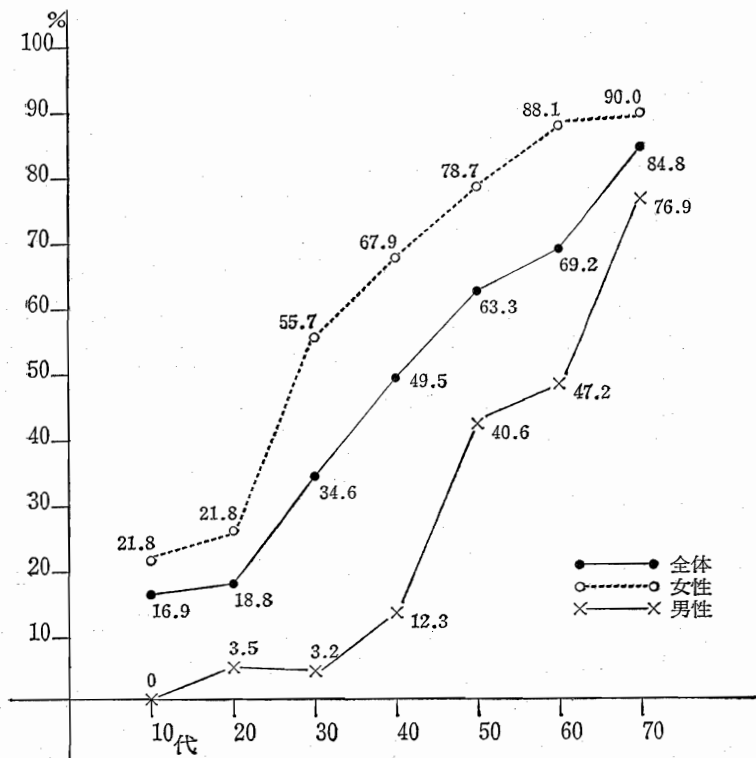
10代にも不識字の人が女性に21.8%いるのをはじめ、年代が上がるにつれ、非識字率が上がり、どの年代も女性の方が男性よりはるかに非識字率が高いことを示している。

以上、女文字の伝わる地域の現在の「文化程度」を主として識字、非識字の観点からみてきた。この結果と女文字とすぐ結びつけることはできな

表6 年代別の「文化程度」

| | | 10代 | | 20代 | | 30代 | | 40代 | | 50代 | | 60代 | | 70代 | |
|-----|-------|-----|----|------|----|------|----|------|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| | | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 |
| 不識字 | | 12 | 0 | 45 | 3 | 78 | 3 | 89 | 8 | 37 | 13 | 37 | 17 | 18 | 10 |
| 識字 | 小学卒 | 25 | 8 | 95 | 28 | 39 | 23 | 26 | 30 | 7 | 9 | 5 | 9 | 1 | 2 |
| | 初中卒 | 13 | 7 | 31 | 50 | 17 | 38 | 14 | 18 | 3 | 8 | 0 | 5 | 1 | 0 |
| | 高中卒 | 4 | 0 | 0 | 1 | 6 | 30 | 2 | 8 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 1 |
| | 高中以上卒 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 計 | | 55 | 16 | 171 | 85 | 140 | 94 | 131 | 65 | 47 | 32 | 42 | 36 | 20 | 13 |
| | | 71人 | | 256人 | | 234人 | | 196人 | | 79人 | | 78人 | | 33人 | |

図1 年代別非識字率比較



い。女文字が盛んであった時期の調査なら、これらの結果と女文字習得とどう関連づけるか、具体的考察の課題となるが、現在はほとんど読み書きできる人もいないし、時間的なずれも大きい。とはいっても、70代以上の女性にとっては、その教育をうける時期であった少女期と、女文字が使われた最後の時期とは重なっている。その世代の女性の90%という非識字率の高さと、女文字とどう結びつくのか。文字を知らないから女文字が生まれたという、発生の理由の裏付けにはなるが、その反面の、文字を知らない女性たちが、女文字を生み、学び、伝える知力と気力をどこから得ていたのか、その原動力は何であったのか、やはり興味ある課題として残されているといえよう。

II-3 女文字の現況

今回の調査——調査票の「対女字了解状況」の(1)~(5)の女文字関連の情報に基づく調査と、従来行ってきた関係者への聞き取り調査——から、女文字の伝承者にいくつもの段階があることがわかった。

その段階を述べる前に、女文字発見とその研究に関わる人物を紹介し、研究史を概観しておく。

1950年代初期、周碩沂（1926生、元江永県文化館職員）が、女文字の資料収集を始め、上江墟郷葛覃村の胡慈珠（1976没）に女文字を習った。

1982年宮哲兵（中南民族学院政治学部）が江永県で少数民族調査を行い、初めて女文字に触れた。1983年「关于一种特殊文字的调查报告」と題する論文を『中南民族学院報'83年第三期』に発表し、女文字が初めて中央に知られることになった。

宮哲兵、周碩沂は女文字のよく書ける高銀仙（甬尾村、1990没）、義年華（桐口村、1991没）の書いた作品を収集し、また2人に、民歌、故事、伝記などを女文字で書いてもらった。

1986年から趙麗明（清華大学中国語学部）が研究に加わり、高、義2人の文字を分析して文字リストを作った。

1990年に陽煥宜（銅山嶺農場、1909生）が女文字を知っていることがわかり、以後趙は彼女の文字を収集している。

1990年、郷政府は義年華を先生とする学習班を組織し、若い娘たちに習わせて女文字の保存を試みた。また93年夏の調査の際、義年華の二女に聞いたところでは、義年華が家で10人ほどの娘たちに教えていたこともあった。

1991年11月江永県で女文字シンポジウムを開き、文字学者、民族学者、歴史学者、地元の教育関係者などが、女文字のルーツ、造字法、伝承者分布、文化環境などを論じ合った。

1993年、遠藤が現地調査を始め、1994年の2回目の調査の際に、新たな伝承者何艶新の存在を確認した。

以上の流れを伝承者中心にたどっていくとその段階性が明らかになる。

女文字が世間にその存在を知られた1983年の時点で、女文字を完全に書けることがわかっていた女性は高銀仙・義年華の2人である。高銀仙は、息子の胡錫仁の話によると、若いころから晩年まで二階でよく女文字を書いていたという。義年華も、隣家の蔣漢池の話では、暇があると女文字を書いていたという。この2人は世間に騒がれる以前から暇があれば書いていた。義理の姉妹間の文通も女文字でしていた。女文字を仲立ちとする義理の姉妹たちもいた。女文字が実用の文字であった。

陽煥宜は少し遅れてその存在がわかった。彼女の話では、娘時代はよく書いたが、結婚後は生活に追われて全く書かなかった。90年、81歳のころ再開するまで全く書いていなかった。趙麗明が調査にやってきて、できるだけ思い出して書いてほしい、と言われた。息子たちにも、今は他に書ける人がいないから書くようにいわれた。そのときは、そんな意味のないことをしたいとは思わなかったが、息子や孫が紙と筆をたくさん買ってきて書け書けと勧めるので、書くようになった。

何艶新（1940生）は（9号-1）で紹介したとおり、94年8月、遠藤が趙麗明と河淵村で聞き取り調査をしているとき、その存在がわかった。彼女は

少女時代祖母から習ったが、実際にその文字で文通したり、意志を伝えるに、使ったことはない。学習して知識として習得している人だ。「96春」調査では実際に使ったことはないにもかかわらず、実に正確に多くの文字を記憶していることがわかった。

その他にも女文字を習った人はいる。前述した1990年の学習班に通った娘たちである。その中の1人桐口村の盧早珍にインタビューした。彼女の話では、1か月ぐらい毎晩食事後に郷政府へ通った。先生の義年華がまず黒板に女文字を書き、娘たちはそれを写した。写してから歌った。一句ずつ書いて一句ずつ覚えた。漢字に似た文字が多かったから覚えやすかった。しかし、昔の皇帝が妃を選ぶといった古い歌でおもしろくなかった。1か月でやめてしまった。そのとき一緒に習った人で今も少し書ける人が何人かはいるが自分はすっかり忘れてしまって何も書けない。

桐口村の調査票の(5)に女文字の書ける人として何人かの名前が書かれているが、それはこの学習班で習った人だと思われる。

その他、最近女文字を書き始めた人がいる。高銀仙の結交姉妹であった唐宝珍もその1人で、今回甫尾村の高銀仙の息子の家を訪ねた際、自分の書いたノートを見せてくれた。それを買ひ、周碩沂に判読を求めたところ、ほとんど意味のない文字の羅列で、歌になっていない、ただ何かの手本を不正確に写しただけということであった。周の見解では「この種の状況は河淵村にも同様に起こっており、近年来形にならない女文字を書く婦人が現われている。これは来訪者の需要に応じて、多少なりとも経済的な実利を得たいと思うからであろう」⁽²⁾ということになる。

93年夏、河淵村へ、胡四四(1994没)という、女文字を織り込んだ花帯の得意な女性を訪ねたことがある。その際、孫が女文字を練習していると言って、8歳の少女に書かせてみせてくれた。孫娘は、見本の文字をただ書き写しているだけであった。字形を見てその字らしきものは書けても、音や歌が伴っていないから、自分で聞いた音を表記することはできない。これでは文字を習得したことはないと思ったことである。

今後、これら伝承者の質の差——90年以前に習得した人と、以後の人——を見きわめながら上江墟郷を中心とする「徹底」調査は行わなければならない。

III 文字学的にみた女文字の現況

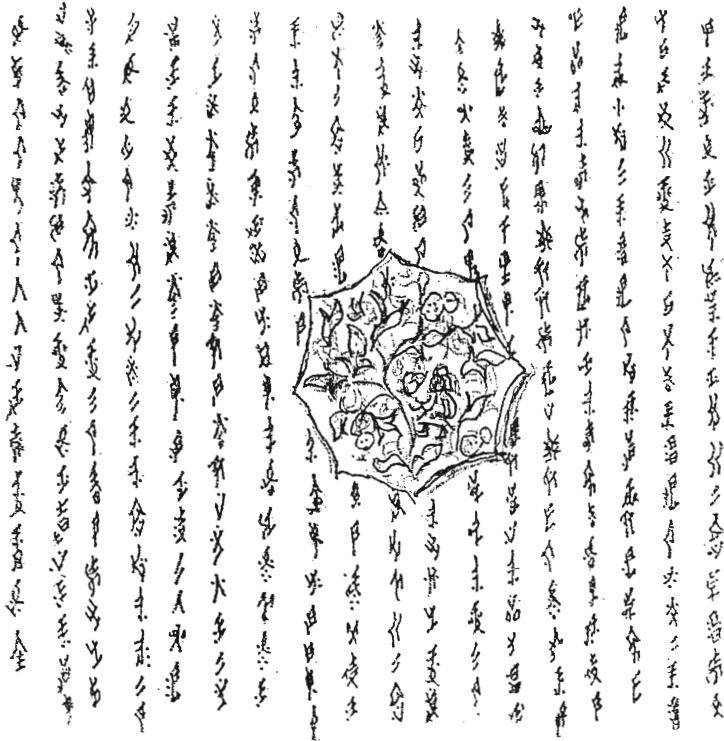
ここでは、陽煥宜と何艷新の女文字作品に基づいて、2人の女文字の文字自体の質について考える。機能の変質については、陽煥宜の文字だけを考察対象とする。何艷新の文字はIII-4で述べるが、90年までの秀れた書き手高銀仙の文字とはほぼ一致するところから、変質は少ないと考えられるからである。

III-1 女文字の機能の変質

女文字を文字学的に見るとき、起源説・体系性・機能性などの問題が挙げられる。従来、前の2点について多く研究・分析が行われ、いくつかの問題が明らかにされてきたが、⁽³⁾⁽⁴⁾ その文字機能についての研究は十分に行われていない。「96春」ではその文字が現在どう機能しているかを中心に調べ、文字としての機能の現状を考察した。

文字の数と機能とが密接な関係にあるのはいうまでもない。中国語では2500字があれば一応98%のコミュニケーションができると言われている⁽⁵⁾。湖南省女書は何種類ぐらゐの文字を必要としているだろうか。女文字の最盛期の作品からは1500～2000の異なり字数が得られる⁽⁶⁾。概数で示したのは異体字を含めるからであるが、一説では670ぐらゐでも間に合うとされる⁽⁷⁾。90年代初期の堪能な書き手であった高銀仙の字数は約700字とされるが、これだけの字数を以てコミュニケーションの役割を十分に果たしてきた。女性たちは実際に手紙のやりとりをし、読み合い、共に歌い合ってきた。しかも、前述の周碩沂のように男性でも学習を通じて習得した人もいる。つまり、この程度の数の文字体系が字習によって身につけられることが証明されている。

図2 陽煥宜が女文字で書いたハンカチ



しかし、96年現在において、わずか2人の伝承者のうちの陽煥宜(87歳)の作品を中心に調査すると、異なり字数はさらに少なく、わずか466しか得られなかった⁽⁶⁾。つまりその数をもってしても、民歌や故事の表記手段としての役割を一応は果たせたものと言えよう。ただし、陽煥宜とそれ以前の書き手(義早早、高銀仙、義年華など)の時間的隔りはわずかに七、八年しかない。この短い期間にこれほど早いスピードで文字が退化(消滅)のほうへ向かっているとすれば、その伝達の機能は果たしうるのだろうか。

その疑問をもって、次のようなテストをした。陽煥宜の書いた作品を、散文と韻文とに分け、周碩沂に解説してもらった。すると、次のような結果が出た。

散文 50% (解読率) (遠藤への手紙)
韻文 (現代) 60% (ク) (ハンカチB) (図2)
(古民謡) 70% (ク) (ハンカチC)

散文の例を見ると、これは96年2月に陽煥宜が遠藤あてに書いて手紙なので、内容としては、新しい情報に属するものが多く、しかも、散文の中に韻文を含めた形となっている。手紙の女文字は307字であるが、女文字研究の第一人者趙麗明が訳せたのはその中の105字であった。もちろん、字のレベルで訳せたと言っても、文としてまだ通じないものが多く含まれ、全体の理解としてはもっと下がると考えられる。事実、周碩沂の解読と比べると、文意が異なる箇所がいくつかあった。書かれたものの中の情報(内容)について既知か未知かが、解読率に影響することもわかってきた。つまり、遠藤あての手紙で、陽煥宜は95年秋の北京での再会を喜ぶ旨を書いており、その事実を知る趙麗明は女文字のその部分を読みとったが、周碩沂には読みとれなかったのである。

江永地方の土話の音を、漢字よりはるかに少ない字数で、一つの言語体系を表記しうる文字との意味で、趙麗明らは女文字を表音文字と位置づけている。だが、表音文字は、アルファベットや日本の仮名など100に満たない字数を使って組み合わせたものが普通である。その点から見ると、女文字はそれらの数十倍もの多くの字数を使っていて、完全に、あるいはすべてを表音的に表しているものではないと考えられる。もしアルファベットのような表音文字だとすれば、単語レベルの組み合わせの定着が不可欠であるし、仮名のような表音文字なら音節の組み合わせで語が表記できるが、女文字の表記ではそうした段階にはまだ至っていないからである。純粹の表音文字でないことは、ある音を発音してその文字を書いてみてほしいと陽煥宜に頼むとき、どのことばの中の音か言わないと書けないと拒否されることがあることから明らかである。

さて機能性の問題にもどって整理してみる。1500~2000字のレベルでは、女文字はほぼ解読されるのに対し、400字レベルになると、その解読率が

落ちるのはなぜか。もし、単純に字種の記憶の減少、あるいは文字力の低下によると考えられるなら、その減少や低下を補うためにどのように統合されてきたかを見なければならぬ。つまり、どの部分が統合されやすく、どの部分がその影響によって負担量が激増したかを分析して始めて、なぜ96年現在の女書が解読しにくくなったかを知ることができるのである。

この問題を考えるための基礎的作業としてまず、本来の女文字の基本的な造字法や用字法を整理する必要がある。その事実をふまえて、変質変化がどの部分に激しいのかをみていきたい。

III-2 女文字の造字法

女文字の造字法について、多くの研究者が言及しているが、ここで改めて独自に整理してみる。

| | | |
|-----|-------|---------------|
| 女文字 | 1 基礎字 | a 女文字創成者独自の造字 |
| | | b 漢字の影響をうけた造字 |
| | 2 派生字 | c 符号添加による造字 |
| | | d 複合による造字 |

基礎字にはa, b, 2種類の造字法のものがある。独自の造字とは、女文字独特の造字パーツ、例えば、△、×、◇、灬、灬などの記号を用いて、作ったものをさす。例えば、ㄣ (漂・飄) ㄣ (門) ㄣ (星) ㄣ (年) ㄣ (何) などである。これらは、図案化されたものが多く、刺繍の図案との関連が考えられる。それに対して数が圧倒的に多いのは漢字の形や部首を改造して作り出したものである。斜めにしたり、画数を略したり、あるいは大胆に漢字の形を変えたりする、例えば 𠂇 (天) 𠂇 (生) 𠂇 (父) 𠂇 (大) 𠂇 (重) などである。これらは、かなり変形されたとは言え、まだ漢字の形のおもかげが窺える。aの独自造字は意味と発音をともに具現しなければならぬのに対し、bの漢字による造字は意味も音声も元の漢字にたよっている点において、非常に便宜的であると言えよう。

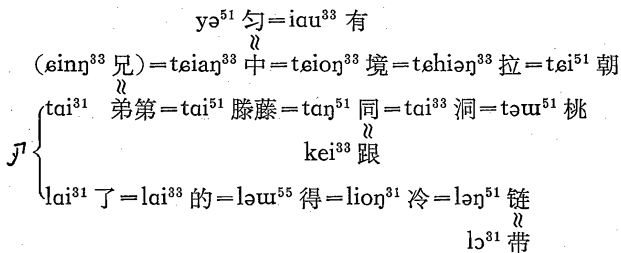
2の派生字は、基礎字をもとにして、さらに記号を加えたりして作られ

ている。cの符号添加の例はク(二)からㄨ(両)や、さらにㄩ(亮)へと造られていったものである。この派生に通底するのは同音、類音字的に表わそうとする意図であり、音の相違の差を意識した結果である。例えば、陳其光(1994)の挙げる42例中延べ数の28例は声調の相違、19例は子音の相違、16例は母音を反映している⁽⁹⁾。


dの、複合による造字とは既成の字形を組み合わせていくものでㄍ(間)ㄏ(田)ㄏ(十)ㄏ(唱)などである。これらは、すでにある字形、例えば、ㄩ(門)、ㄩ(哭)をもとに、さらに別の字形を加えることによって、あらたな字を構成していくものである。

以上の造字法をもとにして、その文字の働きを見ると、音韻・文法・形態のつながりをもちつつ機能している文字の役割を見ることが出来る。例えば、「ㄩ」という女文字の表記する音(訳せる漢字)は全部で20ある。それを整理して図示すると、次のようになる。(・は同音、=は類音、≈は類義、同機能を表す)

まず、同じ舌面子音の混淆と思われる t と l の二つのグループがある。そこから、類音や意味関係へと拡大していくと次のようになる。



この地の土話において、「兄・弟」は同じ概念で、一つの文字「ㄩ」(ɛinŋ³³, tai³¹)をもって表せる。しかし、音が異なるので、それらの音を通じてまったく違う読み方の字を表す方向へ進んでいく。意味上の関連を⋮で示した「兄/弟」「匀/中」「同/跟」のように新たな類義字へとひろがり、それらが「匀・有」のようにさらに同音・類音の字をさそうことになる。このように雪だるま式に広がっていく過程をみると、その中での

段階というものを考える必要が出てくる。末梢にいけばいくほど、その文字の表す意味概念があいまいになる。文字本来、末梢に位置するものも、自己独自の文字をもっているにもかかわらず、他の字との関連で、一つのネットワークの中に位置づけられる。そのネットワークの用い方にひきずられるからである。このネットワークには、さらに字形を中心とするものがある。たとえば「」のグループで、いわば派生字の一族である。


| | | |
|---|---|------------------------|
| ※ | { | ※ piɔŋ ²¹ 並 |
| | | ※ piɔŋ ⁴⁴ 兵 |
| | | ※ piɔŋ ³³ 病 |
| | | ※ phon 拼・篇 |
| | | ※ phion 聘 |


以上のような女文字の応用機能を念頭において、陽煥宜の書いたものを検討すると、彼女の文字の用法の現状がわかってくる。

III-3 陽煥宜の女文字の現状

陽の作品を、他の書き手（高銀仙など）と比べてみると、すくなくとも、次のような特徴が見られる。


(1) 音韻的な連鎖関係がさらに広がる

前に見た「」の系譜図に、陽の使い方をあてはめてみるとさらに、類音関係が拡大していく。

tai²¹の系列にさらに土語の音に該当する「tai²¹ 動・称」「tai⁴¹ 曾」「tau²¹ 道」「tou³³ 豆」が加わり、lai³³の系列に「lai³³ 啦」が加わる。このように、前に見た「」の負担量が26となり、ますます複雑になる。

(2) 類形の統合が進む

前述の「※」の例で、「病」の表記は「※」となっているが陽煥宜は「病」を表すのに「※」を用いている。

また、本来「多」をもって[tsion²¹]を表すことがふつうであるが、陽煥宜は、似た形の「」(ian³³)を兼用している。その結果「玉」の[ian³³]

の音と意味をも表すようになる。

そのため、

$$\begin{cases} \text{teion}^{21} \text{ 正} = \text{teion}^{44} \text{ 諒} \cdot \text{京} = \text{tein}^{21} \text{ 件} = \text{teyn}^{21} \text{ 転} = \text{tsou}^{33} \text{ 漸} \\ \text{pai}^{25} \text{ 本} = \text{pou}^{35} \text{ 打} \\ \text{ian}^{33} \text{ 様} \cdot \text{用} = \text{ian}^{44} \text{ 齋} \end{cases}$$

となり、「𠂔」の字形から音声的に新たに [ian³³] を加える結果になっている。

また「𠂔」は本来「義」の略字の「𠂔」を天地逆にした形に由来する女文字であるが、音声的に [ni³³] (義) と、本来違う形の「𠂔」 [niə³³] (要)、 [niə⁴⁴] (尔、人) と近い関係があるし、形態上にも、「𠂔」と漢字「个」「人」と似ているところから、「𠂔」のほうへ統合して使われている場合が多い。たとえば、高銀仙が「𠂔」としているところを陽は「𠂔」としている。

(3) 類義的なものの統合

意味や、文法機能が同じ、または類似している場合、一つの文字に統合されていく、

𠂔 → 不・来・莫・歪

𠂔 → 亦・又・若・犬

このように音声・形態・意味の統合が進むと、当然の結果として共通の約束ごととしての記号の機能は低下していく。音声の場合、本来許容範囲内の声調をこえて子音、母音まで広がると、記号の弁別機能が少なくなる。形態上の統合もいわゆる「正誤」の域をこえて、より簡潔になるのが特徴であるが、それゆえ、逆に統合されたものの個々負担量が多くなりすぎて、適切な情報を伝えあうことが難しくなる。陽煥宜の文字の解説が難しくなっているのは、こうした単純化、統合化の結果であることがわかる。すなわち、陽煥宜の女文字は文字としての機能を失いつつあり、文字の衰微、消滅の最終局面にあることを伝えている。

III-4 何艶新の文字の現状

何艶新は、(9-1号)で報告したとおり、94年夏最初に、我々の前で女文書いてみせてくれたときは、一字一字をやっと思いつきながら書いているようで、一字一字に手間取り、書き直しも多く、字形も整わずきわめて稚拙な文字であった。

しかし、その後の回復ぶりはめざましく、95年4月には実に美しくそろった女文字を認めたハンカチを送ってくれたし、「95」では、書こうと思うことは何でも書ける、と答えてくれていた。では、何艶新は陽煥宜の後継者として位置づけることができるほどの完全な伝承者といえるのだろうか。

「96春」では、何艶新の文字力を知るため高銀仙の文字と比較しその差を検討した。

すなわち、高銀仙が生前書き残した女文字作品と同じものを何艶新にも書いてもらって一字一字対照させその一致不一致の状況を調べるといのものである。ここで同じものというのは、内容が同じということで、高銀仙の文字を見せて同じものを書いてもらうということではない。

高銀仙は生前「三姑記」という、この地方に伝わる故事を女文字で書き残した。それが『女書—世界唯一的女性文字—』(宮哲兵編婦女新知基金会出版部、台北市、以下「台北本」とする)に採録され、漢字へ翻字したもの(以下「漢字訳」とする)が示されている⁽⁹⁾(図3)(図4)。漢字訳を、漢字の教育を受けた何艶新⁽⁹⁾にみせて、それを女文字で記してもらった。この何艶新の文字(図5)(以下「何文字」と記す)と、台北本に掲載された高銀仙の文字(以下「高文字」と記す)とを一字一字比較対照した。対象としたのは「三姑記」の前半840文字である。

この作業の結果以下のことがわかった。

A 両者が一致しない文字

ア 同音、類音、類義語で、両音の選択に差が出たと思われるもの(以下例は、高文字→漢字訳→何文字の順に記す)

- ① 𠂔 → 間 → 𠂔 ② 𠂔 → 一 → ノ ③ 𠂔 → 如 → 𠂔 ④ 𠂔 → 多 → 𠂔
 ⑤ 𠂔 → 女人 → 𠂔 ⑥ 𠂔 → 莫 → 𠂔 ⑦ 𠂔 → 最 → 𠂔

図3 高銀仙の書いた「三姑記」の漢字訳（台北本）

苦口良言奉勸君，爲人莫把起黑心。起心害人終害己，
 明有官府陰有神。男子莫用兩把斗，女子莫用兩樣心。
 莫把大斗量進去，莫把小斗量出門。大秤小斗天雷打，
 最怕皇天不順情。莫說皇天有歪意，舉頭三尺有神靈。
 年歲過老難贖脫，莫把壞穀添斗升。你賣貴穀收賤米，
 後代子孫不安寧。別的閒言都不唱，再把三姑你說聽。
 此書不是遠年事，光緒年間一新聞。家住湖南永州府，
 王家村內有家門。東門出城二十里，地名叫做王家村。
 王姓公公家豪富，家有良田五百零。老娘叫做王婆婆，
 所生一男三女身。一男在外讀書子，三個女人嫁出門。
 大姑也嫁張家內，二姑嫁在李家門。三姑嫁在蕭家去，
 三個女人嫁了人。大姑家中多豪富，二姑家中有金銀。
 只有三姑命爲苦，嫁在蕭家來愁貧。家中也無隔夜米，
 身上也無好衣襟。天氣寒冷衣單薄，床上無被冷清清。
 身又冷來肚又餓，每夜繡花到天光。可憐三姑命也苦，

①～④・同音異字のグループで二人の選択の差が表れたものである。

⑤は「女人」(niu²¹ia⁴¹)を何艶新は「𠂔𠂔」(niu²¹ei³³)と表記しているが、この文字は「女兒」に相当する。別の箇所で高文字の「𠂔𠂔」は「女兒」と漢字訳されており「女人」と「女兒」はこの地の土話では混同されやすい——両者を厳密に区別せず使われることが多い——ことばであることがわかる。したがって、何艶新の誤記ではなく許容範囲内の選択の差ということになる。

⑥は否定辞の不一致である。III-2-(3)でも述べたように高文字の「𠂔

ma²¹・𠃉 mu³⁸・𠃉 ma²¹」は否定辞として共通しているが、3文字間の厳密な区別は必要としない。そのため何文字も高文字とは異なる否定の文字を選んだと解釈できる。

⑦も、高文字「𠃉 tɛyɔ³¹」と何文字の「𠃉 tɛyɔ³³」は類音の文字であり、許容範囲内の別文字といえる。

イ 台湾本の漢字訳が原因と思われる差

- ① 𠃉 → 听 → 𠃉 ② 𠃉 → 貧 → 𠃉 ③ 𠃉 → 莫 → 𠃉 ④ 𠃉 → 村 → 𠃉
⑤ 𠃉 → 说 → 𠃉

①の高文字「𠃉 tsion⁴¹」はこの地の土話の漢字訳では「情、停、庭」となるところ、類音の「tsion³¹」に相当する「听」と訳されたため何艶新はそれに基づいて「𠃉」の女文字を用いた、ということである。何艶新の誤記ではないことは、別の個所で「𠃉 → 情 → 𠃉」と「高文字」と同じ文字を用いていることから明らかである。

②も、「𠃉 sai³⁸」は「心・新・芯」の漢字にあてるところ「貧」にあてられていたので、何艶新は「貧」に該当する「𠃉」の文字を記したのである。この文字についても別の箇所では「𠃉 → 心 → 𠃉」と同一文字を用いている例がある。

ウ 文字の順序が異なるもの

- ① 𠃉 𠃉 → 女兒 → 𠃉 𠃉 ② 𠃉 𠃉 → 富豪 → 𠃉 𠃉 ③ 𠃉 𠃉 → 嫁過 → 𠃉 𠃉

いずれも文字の順がかわっても意味の違いのほとんどない類語である。

漢字訳の字の順を読みちがえたか、その差に気づかなかったかどちらかであろう。

エ 何艶新の誤記と思われるもの

- ① 𠃉 → 世 → 𠃉 ② 𠃉 → 难 → 𠃉

①の何文字の「𠃉」は、趙麗明の作った文字リストにも入っていないもので、何艶新の造字と思われる。

②の何文字「𠃉」も上記女文字リストにもないもので「难」の字形の一部模倣による造字と思われる。ただし「难」に該当する女文字「𠃉」は

別の箇所では高文字と同じ字を書いているのでこの字を知らないということではない。なぜこのような造字をしたのか理解に苦しむところである。字形が漢字に酷似しているところから、不注意に女文字のつもりで書いてしまったのであろうか。

B 両者の字形が類似しているもの

- ① 夕 → 可 → 夕 ② 夕 → 他 → 夕 ③ 夕 → 尽 → 夕 ④ 夕 → 说 → 夕
 ⑤ 夕 → 蕭 → 夕 ⑥ 夕 → 娘 → 夕 ⑦ 夕 → 苦 → 夕 ⑧ 夕 → 天 → 夕

いずれも異体字と思われるもので、①②は字形が少し異なるもの、③④は点画の数が異なるもの、⑤⑥⑦は一部の筆画が脱落しているもの、⑧はより漢字に近づいて本来の女文字と異なる字形になったものである。

以上のようにみると、何艶新が高銀仙と異なる文字を書いている箇所はそれほど多くなく、また異なる文字を書いたところでも、それは、同音異字など同一人物でも同音の文字を書き分けたりするような選択の差であったりして何艶新の文字力が低いための差ではないことがわかった。B—⑧のように漢字に似ているために高銀仙と字形が異なる文字は他にも、

- 夕 → 大 → 夕 脱 → 脱 → 脱 夕 → 衣 → 夕 夕 → 夫 → 夕

などがある。これは、何艶新が漢字の教育を受けているので当然のことともいえる。また、漢字の知識が、漢字に似た、あるいは出自が共通する女文字の習得を容易にし、記憶回復の手がかりを与えていることも考えられる。

何艶新は幼時祖母から習っただけで、実際に他の女性とのコミュニケーション手段として使ったことはない、と言っている。しかし、彼女は祖母から習った古い歌や故事を女文字で表記することができるだけではない。現在の心境を何か書いてほしいと頼んだら、少し考えたのち(図6)のような句を書いてくれた。その時入院中の夫のことを思うと涙がとまらないという内容で自分の思いを女文字で表現したものである。これは、かつての女性たちが義理の姉妹たちと思いを交わした女文字の使い方と同じである。かつての女性たちと同じように、何艶新は故事も写すが、自らの思い

図6 何艶新が即興で書いた歌の一句 (一)



を即興で歌う詩人でもある。

高銀仙らの書き手と違う点は、次の2点である。ひとつは漢字を知る何艶新は、女文字にもその漢字の形が影を落としていること。ふたつめはかつての書き手たちが、同音類音の文字やことばを自由に往き来したのに対し、漢字を常に意識する何艶新はある漢字にあてる文字として固定的に考える傾向があるということである。

IV おわりに

陽煥宜こそ正統な伝承者で、50代の何艶新は実際に使ったこともなく、文字力も低く、本格的な伝承者とは言えないだろう、と今まで莫然と考えていた。

今回の調査で、陽煥宜の文字は、他人が読み取れない部分があり、時には自身でも、少し前に書いたものが読めなくなるほどの幅の広い使い方——基本的な書き方から逸脱している——になっていることがわかった。一方、何艶新は、字形に漢字の影を反映していることは多いものの、音の表記の面では従来の書き方をほぼ正確に踏襲していることがわかった。

94年夏初めて何艶新に会い、たどたどしい文字を書くのを見たとき、陽煥宜に習って文字力を回復してほしいと頼んだ。しかし、何艶新は体の不調や家族の病気などで、それはしていなかった。そのことが結果からみてよかった。

文字の側からみると、機能が統合され、文字が単純化されていくのは歴

史的にみても自然な推移であり、陽煥宜はその流れの中にいる。流れをはやめる役割を果たしているといってもいい。90年に陽煥宜が「発見」されたころ、他の書き手は亡くなり、彼女は唯一の書き手として脚光をあびてきた。それ以来の彼女の文字は研究者のために書かれるもので、女性間の伝達という、本来の目的のために使われてはこなかった。唯一の書き手であるから、その文字が自在に大胆に幅広く使われてもそれをチェックする人はいない。このことが、陽煥宜の文字の変質に拍車をかけていると思われる。

それにひきかえ、何艶新のほぼ正確な文字の使い方は、文字の変化の歴史の中では逆行している。復古派とでもいうべき存在である。それは、何艶新が書き手として登場してまだ日が浅く、彼女の祖母からの記憶が純粋に保たれているからであろう。

87歳の、娘時代よく使っていた陽煥宜の文字が、文字としての機能を失いつつあるのに対して、56歳の幼時に習っただけの何艶新の文字が古い形を正確に残しているといういわば逆転現象をどう説明すればいいのか、現在の段階では明確な解答を見出しえない。

今後、何艶新の文字についてさらに研究する必要があるらう。

また、陽煥宜の文字の統合の過程からは、女文字の背後にある言語の文法システム、意味体系の変化の事実も透けてみえてくる。女文字研究を契機に文法研究への新しい興味もそそられるところである。

(Ⅲ-1～Ⅲ-3は陳力衛、Ⅲ-4は劉穎、それ以外は遠藤が担当した。全体の文責は遠藤にある)

注

- (1) 「95年中国女文字調査報告」(『ことば10号』現代日本語研究会、1995)
- (2) 1996年5月7日付、周碩沂の遠藤宛書簡。
- (3) 宮哲兵編『女書—世界唯一的女性文字—』(婦女新知基金会、台北市、1991)
- (4) 趙麗明『女書与女書文化』(新華出版社、1995)
- (5) 木村英樹『中国語ははじめの一步』(筑摩書房、1996)

- (6) 陳其光「女書の造字法和用字法」『語言研究』'94.2
- (7) (3)と同じ
- (8) 『中国女書集成』（趙麗明編清華大学出版社、1992）に収められた陽煥宜の作品の字数。この他に1992年以後書いているものもあるのでこの数はもう少し増える可能性がある。
- (9) 用例は(4)による
- (10) 同書の解説によると、ここに示される文字は高銀仙の手によるものではなく、(4)(2)と同じ高銀仙の文字を、編集に携った女性が見て写したものだという。

（文中の敬称は省略した）